

人工知能学会全国大会における 他者との身体的相互作用による学びに関する研究発表

環境情報学部 4年 桑山菊夏

1. 概要

日程：2016年6月6日 - 6月9日

場所：福岡県北九州市北九州国際会議場、西日本総合展示場新館・本館, AIM 3F

主旨：

本活動では、第30回人工知能学会全国大会において、心身まるごとの自己と他者のかかわりと、それが自己に与える影響についての申請者の考察について発表した。

申請者は、日常における他者とのやりとりを「対話」と捉え、それを促す工夫をするという自己と他者とのかかわり方と、それが自己の学びに及ぼす影響について考察してきた。2015年より進めてきた考察内容とその考察プロセスについて、「他者との対話をとおして『わたし』を見つめる」のタイトルのもと、人工知能学会全国大会において発表を行った。ここで「わたし」とかぎ括弧をつけるのは、他者とのかかわりによって相対的に変化する身体・思考などを包括する自己を「わたし」と定義するとともに、その刹那的な「わたし」の総体こそが個人の人生を背負った唯一無二の「わたし」そのものであるという主張を含意しているためである。今回の発表においては、発表においては、「わたし」から他者との対話を促す試みとして、「吐き出す」と「耳を傾ける」との二点を挙げた(図1)。このような自己再帰的エスノグラフィー [1] に着想を得た提案手法と、この手法が「わたし」にどのような変化を及ぼすのか考察した過程を論じた。他者との対話を「わたし」から促そうとすることが、自己と他者で成り立つ物語をより豊かにすることにつながり、自己や他者が新たな価値を見出し合う手助けになるのではないかという仮説を述べた。

このような申請者自身の理論について

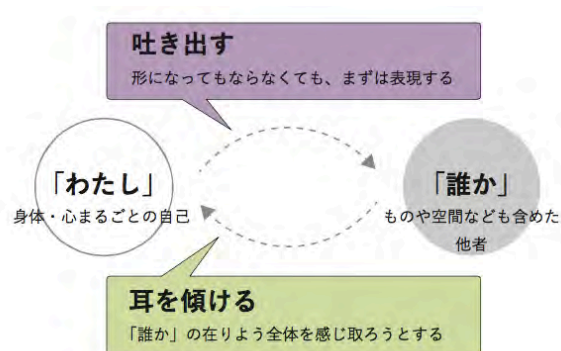


図1 「わたし」から対話を持ちかける試み

人工知能学会全国大会にて発表し、自己と他者とのやりとりとそれが自己に及ぼす影響について意見交換の場を得るとともに、本研究に関してのフィードバックを得ることを目指した。

2. 成果

本活動において申請者は、大会内で催されたオーガナイズドセッション「知の身体性」における口頭発表と、インタラクティブセッションにおけるポスター発表を行い、参加者からフィードバックを得た。

オーガナイズドセッション「知の身体性」においては、人工知能研究において昨今さかんに議論されている知の持つ身体性という概念[2]について関心を持つ人々に対して研究発表を行った。口頭発表後の質疑などで他の発表者や参加者と交流し、本研究についての課題や新たな観点を得た。

また、インタラクティブセッションでは、それぞれ多様な背景を持つ参加者と議論することができた。申請者自身の日常での実感や出来事、文献に対する解釈やなどによって創出された一人称視点の理論に関して、さまざまな視点から率直な意見を得て議論することができた。

3. 今後の発展

今回、申請者は、2015年より所属研究室において発表の場を設けつつ構築してきた理論について、初めて公の場で研究発表を行った。さまざまな背景を持つ人々から多くのフィードバックを得て刺激を受け、自らの研究について多くの課題を再認識した。その一つとして、これまで申請者自身の視点で構築した自己と他者についての理論と提案手法、そしてこれらが自己に及ぼす影響について考察してきたが、これらの理論の実践が他者にどのような影響を及ぼしているのかという点についても着眼する必要性を強く感じた。その他、多くの新たな観点や知見を得た。また、さまざまな意見や他発表者の研究に刺激を受け、自らの研究における今後の姿勢や取り組み方についても思いを新たにした。それらを生かし、今後も、自己と他者との相互的なかわりについて考察し、さらなる発展に努める。

参考文献

- [1] 藤田結子・北村文 編 (2013). 現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践. 新曜社.
- [2] 諏訪正樹・藤井晴行 (2015). 知のデザイン. 近代科学社.